

## 「死に場所ね……」 緩和ケア病棟に移った時の 母のつぶやき



病院へ行くと、どこか雰囲気の違い病棟に出くわすことがある。

ホスピス病棟、最近では緩和ケア病棟とも呼ばれる。治療の施しようがなくなった患者が最後に入るところだ。

都内在住の50代女性は、80代で末期がんの母を一般病室からケア病棟に移すことができた。

「ここなら一緒に寝泊まりできますし、精神的なケアも専門医が診てくれるので安心です」

病院の病棟は、展望のいい最上階にあり、もちろん、全室個室で台所も完備。部屋代が1日3万円と高いが、家族が最期をみとるには理想的な環境だ。

もともと、日本ホスピス・緩和

しかし、母は入室するなり、「ここが死に場所ね」とつぶやいた。患者同士の情報交換で、どういふ場所か当然知っていたようだ。

現在、全国の223病院（4434床）に緩和ケア病棟があり、どこもフル回転の状況。そのひとつ、がん研有明

ケア研究振興財団の最新アンケートによると、8割超が「自宅で死にたい」と希望している。特に20代と70歳以上にその傾向が強く、60代が一番少なかった。

ただし、「実現は難しい」という回答が63%。実際に在宅死が可能な人は18%しかいない。

全国介護者支援協議会理事長の上原喜光氏がこう言う。

「家族には迷惑をかけられないという思いが真っ先に立つ。厚労省は、団塊世代が75歳を越える2025年までに在宅死を4割に引き上げる目標を掲げていますが、死に場所くらいは自分で決めたい」

病院死の割合は、一昨年で全体の78%。眺めのいい病棟に移った瞬間から、「その時、を覚悟するしかない。」